

宮城学院中学校における平和教育

—平和宣言作成を通して—

丸山 仁

はじめに

宮城学院中学校が中学三年次の校外研修旅行先として長崎を訪問するようになって二〇二一年度で十八回目となる。しかし二〇二〇年度は残念ながら新型コロナウイルスの流行によりはじめて中止とせざるを得なかった。^①二〇二一年度も七月下旬からの関東圏や関西圏を中心とした新型コロナウイルス新規感染者数の急増、さらに東北地方における感染拡大を受けて残念ながら二年続けて長崎への校外研修旅行は中止という判断をせざるを得なかった。

これまで筆者は長崎への校外研修旅行について、校外研修旅行委員会の担当者として、社会科学の授業担当者として関わってきた。そうした視点からこの校外研修旅行についてまとめたことがあった。^②またこの校外研修旅行の学びとNIE（教育に新聞を（Newspaper In Education））活動との関係についてまとめたことがあった。^③

それらの前稿でも部分的には指摘してきたことではあるが、本稿では長崎校外研修旅行において平和祈念像の前で

行う平和式典で読み上げてきた歴代の平和宣言を紹介し、若干の考察を行うこととする。

一 歴代平和宣言

まずは二〇一一年度から二〇二〇年度まで十年間の平和宣言全文を以下に紹介する（なお平和宣言文の傍線は筆者が加えたものである）。

二〇一一年度

昭和二十年八月九日午前十一時二分。この長崎の街に原子爆弾が投下されました。今から六十六年前のことです。この一発の爆弾が、多くの人たちのささやかな日常生活を一瞬で奪いました。想像してみてください。コンクリートの建物でさえ溶かしてしまう熱風、熱線に襲われた街、そして人々の姿を。七万四千人の尊い命が失われ、長い年月を経た現在でも、戦争の記憶に苦しめられている人がいます。放射能の影響で今なお、後遺症に苦しむ人もいます。目に見えない放射能の恐怖は六十六年という年月を経た今も、人々を苦しめているのです。生きながらえた人たちも、就職や結婚に際していわれのない差別を受け、心身に負った傷を理解されることのない現実にとれほど傷つき、憤ったことでしょう。同じ人間同士が互いに憎み合い、傷つけ合う戦争。その結果作り出された核兵器は、長崎の人たちの心と体を傷つけ、むしばみ、過去、現在、未来を奪ったのです。この苦しみ、哀しみ、声なき悲痛な叫びを私たちは決して忘れてはなりません。

戦争は命の奪い合いです。何の罪もない多くの命を奪うのです。人間同士の争いからは悲惨な結果しか生まれない。

それなのに、どうして人間は戦争をするのでしょうか。争いを続けるのでしょうか。作りだすのが核兵器ではなく、人の命を救うためのものであったなら、この世界で明るい希望を持つことができるはずです。本来、私たち人間の手は、人を傷つけるためにあるのではなく、困っている人たちに差し伸べるためにあるはずなのです。今を生きる私たちの手は、どのように使われているのでしょうか。傷つけるためではなく、差し伸べる手として使うことができているのでしょうか。私たちを取り巻く環境は大きく変化し、問題の有り様も刻々と変化しています。インターネットの普及・進化に伴い、便利で快適な生活を得た一方で深刻な問題も増えてきました。それは、使い方を誤れば、外見上表面上には相手に傷一つ残すことはなくても、目に見えない深い傷を心に与える結果に陥ってしまうということです。私たちは素晴らしい技術を作り出す力を持っている存在であるからこそ、その使い方を深く考え、行動しなければならぬのです。そのためには何をなすべきなのでしょうか。身近なところで身近な人を傷つけてはいないのでしょうか。私たちはまず、身近な平和を紡いでいくべきなのです。

戦争から六十六年が経ち、私たちにとってあの戦争は遠い過去のものとなりました。日々の生活は平和であることが当然で、「平和」について意識することはほとんどなくなりました。しかし、今年の三月十一日に発生した東日本大震災によって、当たり前だと思っていたこの「平和」は一瞬にして崩れ去り、私たちは初めて「平和」というものの尊さを自分自身のものとして考えたのではないのでしょうか。日々の生活が当たり前に享受されるものではなく、とても尊いものであることに気づかされたのではないのでしょうか。そして、六十六年前にこの地で暮らす人たちのさややかで尊い日常を奪った「原子爆弾」は、現在、「原子力」と形を変えて、私たちの日常を脅かすことになりました。「核」の問題が語られる時、ヒロシマ、ナガサキに続いてフクシマという新しい場所が世界に知られることになりました。

した。放射能の恐怖は過去のものではなく、現在の問題となつてしまつたのです。唯一の被爆国である日本で、また同じ苦しみや恐怖が生まれたことに疑問や理不尽さを覚えます。しかし、あの震災を経験した私たちだからこそ、長崎の被爆者の方たちの苦しみや哀しみを理解することができないのではないかと考えます。地震や津波は自然が起す現象で、人間には為す術はありません。しかし、原子爆弾も原子力も人間が作り出したもの。人間が作り出したものなら、人間がなくすることもできるはずですが。

この長崎の街が、市民の努力や多くの支援で再び美しい街を取り戻したように、そしてその努力やメッセージが日本の平和憲法の礎となつたように、そして今、東北の各地で人々が復興の道を歩もうとしているように。再び同じ悲劇を繰り返さないために、私たちにできることは必ずあると思うのです。今、核兵器のない平和な世界を求めて核兵器廃絶運動の取り組みがおこなわれ、世界市民の声が国際社会を動かす力になっています。これは、平和への確かな一歩です。この歩みを途切れさせないように努力すること。互いに支え合い、協力しあつて明るい未来を作ること。相手のことを思いやつて行動する力を私たち人間は持っています。その力を遂行すること、それがこれから生きる私たちの責務であると考えます。

最後に、この地で亡くなられた犠牲者全ての方に心から哀悼の誠を捧げ、核兵器のない世界を一日も早く実現するために努力し、未来への責任を持ち続けることをここに宣言します。

二〇一一年十月四日 宮城学院中学校第三学年一同

二〇一二年度

日本は、第二次世界大戦という歴史のなかで「核兵器の恐ろしさ」を身をもって経験し、非核運動を続けてきまし

た。今現在、日本のように核を保有していない国も多くあります。しかし、核保有国が存在しているのもまちがえない事実であり、完全な核廃絶はまだ先の未来のことです。

一九四五年八月九日午前十一時二分、日本に二発目の原子爆弾がここ長崎の地に投下され、多くの人を犠牲にしてやつと戦争が終わりました。「原爆投下により戦争が終わった」という意見もあるようですが、「原爆が投下される前に戦争をやめることができなかつたのか」という意見の方が遥かに多く、このような悲惨な歴史を二度と繰り返してはならないという強い決意のもと、日本は日本国憲法の三原則の一つに「平和主義（戦争放棄）」を盛りこみました。さらに核兵器を「持たず、つくらず、持ちこませず」という「非核三原則」を掲げました。今、私たちが日本で平和に生活することができているのはこの「平和主義（戦争放棄）」や「非核三原則」のおかげなのです。

あの戦争から六十七年経ち、私たちは核・放射能の恐ろしさを忘れていました。しかし、昨年三月十一日に起きた東日本大震災で福島第一原子力発電所から放射能が漏れ、福島の方々だけでなく日本全体に被害が及び、改めて核・放射能というものを意識させられました。あれから一年以上経った今でさえ、福島原発の周囲には近づくことすらできません。人々の生活を大きく変えてしまいました。放射能による汚染とは、それほどまでに長く堆積し、人々の生活を苦しめるものなのです。さらにその影響は人体そのものにも甚大な影響を及ぼし、放射能を浴びてしまうとガン^①の発生率が高くなるなど大きな被害があるのです。

この地球上では、まだ各地で戦争や紛争が続いていて、核兵器が使用される危険は、今この瞬間にもあります。想像してみてください。もしも地球上に存在する約一万九千発の核兵器が使用されれば、その被害は広島・長崎における原爆投下の比ではなく、もしかすると人類滅亡へとつながるかもしれません。その意味において、今や地球上には

平和で安全な国はどこにもないということになってしまいました。私たちは常にそのような危険と隣り合わせのなかで暮らしているのです。

人類の歴史をここで途絶えさせないために、世界中で核兵器廃絶の取り組みが行われてきています。そのなかでも日本は唯一の被爆国として、その取り組みの先頭に立って核兵器の廃絶を世界に訴えていかなければなりません。

核兵器だけでなく、二つの大きな世界大戦を経てもなお地球上からなくなるならない戦争もまたしかりです。戦争は苦しみや憎しみ、哀しみ以外、何も生み出しません。戦争で苦しむ人を出さないためにも、私たちは平和を強く訴えていかなければならないのです。私たちは戦後生まれで戦争を体験したことはありません。しかし本物の戦争を経験したことはない私たちだからこそできることがあるのではないのでしょうか。

その一つが原爆の恐ろしさを次の世代に伝え続けることではないでしょうか。戦後六十七年が経ち、戦争を経験し、核兵器の恐ろしさをその身でかかえて生きてこられた方々はご高齢とられました。被爆者の方々の平均年齢は七十七歳を超えたと聞きました。すでに亡くなられた方も多く、一層早く原爆の記憶が風化しないように取り組みを進めていく必要があります。戦争を知らない若者が戦争を語り継ぐことは、難しいことのように感じます。ですが、どんな小さなことでも良いのです。私たちは戦争を体験された方々の平和に対する強い願いや心の叫びを全身で受けとめ、さらに戦争や平和について学び、戦争を起こさないために自分ができるかを考え続けなければならないのです。

戦争のない今の日常生活は与えられたものではありません。戦争の反省に経ってこれまで六十七年間、努力して築き上げてきたものなのです。私たちは戦争のない平和な暮らしを守るため、さらには「世界平和」を実現するために、

一人ひとりができることをしなければなりません。

原爆で数多くの尊い命が失われました。いまなお原爆が与え続けている多くの苦しみ。その真実はこれからも語り継がれていきます。過去には戻ることはできません。「変えていける」のは未来であり、「変える」のは今です。

最後に、原爆によって亡くなられたすべての方々々に哀悼の意をささげ、私たちは核兵器のない世界、そして戦争のない平和な未来を実現するために努力することをここに誓います。

二〇一三年度

二〇一二年十月四日 宮城学院中学校第三学年一同

六十八年前の一九四五年八月九日午前十一時二分、まさにこの長崎の上空で日本に二発目の原子爆弾が投下され、多くの人を犠牲に第二次世界大戦は終結しました。歴史的に見れば終結と言えますが、犠牲者の苦しみはここから始まりました。幼くして家族を奪われた原爆孤児や、病に侵されながら苦難と孤独に耐えてきた被爆者、被爆したという事で差別偏見を持たれ苦しんできた人。一発の原爆は絶対に必要ないものであり、二度と繰り返されてはいけません。

あの戦争から月日が経ち、私たちは核や放射能の恐ろしさを忘れていました。二〇一一年三月十一日東日本大震災により私たちは被災しました。当たり前だと思っていたことが当たり前ではないことに気づかされました。家や家族を失い、二年半経った今でもたくさんの方が悲しみに陥り、その痛みは癒えることはありません。さらに原子力発電所で起きた原発問題は今なお深刻な状況に置かれ、私たちは危険と背中合わせに暮らしています。原爆と違い、原子力発電所は私たちの暮らしを便利にするために自らつくったものです。私たち人間は暮らしを豊かにしようとす

るあまり、一步間違えれば命や生活を奪う凶器になることを忘れていました。東日本大震災を経験し、世界で唯一原子力爆弾を投下された日本だからこそ、世界に発信していかなくてはいけない思いやメッセージがあるはずです。そのためには私たちの若い世代からもっと核廃絶について、一人ひとりが考え関心を持ち、戦争を体験された方、被爆された方の話を語り継がなければなりません。

核の問題だけでなく、世界では戦争や紛争が今なお続いています。その戦争や紛争によって多くの犠牲者が生まれ続けています。日本は戦後の再出発にあたり、日本国憲法の前文や第九条で戦争放棄を誓いました。日本国憲法の平和主義の存在が大きいのです。しかし、近年、日本でも自衛隊がPKO協力法に基づき海外に派遣されたり、集団的自衛権の問題が議論されるなど、戦争との距離が近づいていると考えられるのではないのでしょうか。今の日本は本当に平和に向かっているのでしょうか？ 戦争をつくっているのは人間同士。人間の心を変えるには教育が必要です。私たちは戦争のことをよく学び、理解し、絶対に戦争をしてはいけないという認識を持つことが重要です。

二〇二〇年のオリンピックに東京が選ばれました。これは日本人として誇らしいことです。勝ち負けやメダルの獲得数、記録に目が行きがちなオリンピックですが、本当の意義とは何でしょうか？ オリンピックは「平和の式典」です。世界が平和であることを願って、人間の心や体が健全なことを願ってオリンピックはできました。環境が違えば、文化が違って当然です。信仰が違えば、価値観が異なったりあてまえです。そのような国境や文化、宗教を越えてスポーツを通して平和な時間を共有し、同じ喜びを分かち合おう、これがオリンピックが開催されていた意義でした。二〇二〇年の開催国になった日本だからこそ、私たちは本当のオリンピックの意味を理解し、平和を希求することを続ける必要があります。

長崎市長は二〇一三年度の平和宣言の中で私たち若い世代にメッセージを伝えています。「あなた方は被爆者の声を直接聞くことができる最後の世代です。六十八年前、原子雲の上で何があったのか。なぜ被爆者は未来のために身を削りながら核兵器廃絶を訴え続けるのか。被爆者の声に耳を傾けてください。そしてあなたが住む世界、あなたの子どもたちが生きる未来に核兵器が存在していいのか。考えてみてください。お互いに話し合ってみてください。あなたたちこそが未来なのです。」私たちはこの長崎での校外研修旅行で見たもの、聞いたこと、感じたことを覚え、このような悲惨な出来ごとが二度と起らないよう努力することを誓います。

マタイによる福音書に「平和を実現する人々は幸いである。その子たちは神の子と呼ばれる」とあります。一人ひとりの力は小さいですが、それぞれに与えられた賜物を活かし、「平和を実現する人」になれるよう努めていきます。核兵器の廃絶と平和な世界の実現に向けて力を尽くすことを誓い、原爆によって亡くなられたすべての方に向かっての哀悼の意をささげます。

二〇一三年十月四日 宮城学院中学校第三学年一同

二〇一四年度

「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を この広い世界の 人々の中に」

「あの忌まわしい日を 繰り返さないで」

これは、長崎の被爆者歌う会・ひまわりの皆さんが今年の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典で歌った曲「もう二度と」の一節です。今から六十九年前の昭和二十年八月九日午前十一時二分、長崎の街に原子爆弾が投下されました。すさまじい熱線と放射線と爆風は一瞬にして多くの人々の命を奪い、ささやかな日々の生活を奪い、生き残った人たちも

今なおその後遺症に苦しめられています。原子爆弾は、身体だけでなく心にも大きな傷を残し、時が経てもその傷跡が癒えること、消えることはないのです。

唯一の被爆国である日本は、原爆投下の日から今年で六十九年目を迎え、七十年目へと歩み始めました。戦争や原爆の「あの日の体験」を語ることができる世代の方々が減っていく今、戦争を知らないわたしたちができることは何でしょうか。わたしたちは大きな不安を感じることもなく、毎日の生活を送ることができています。学校に通い、家族や友達と過ごし、食事や安全について心配することもなく、戦争も起きていません。しかし、世界を見渡せば紛争や内乱が続く国々があります。満足な食事を得ることができない人々もいます。自国を守るための道具として核を保有する国が多数あり、地球上には現在一万六千発以上の核弾頭が存在しています。また、日本国内でも集団的自衛権の問題や近隣諸国との確執、原子力発電所の事故処理や再稼働を巡る問題が山積しています。こうした現状を考えたとき、「平和」というものの考え方が揺らいでいるように感じるので、自国で戦争がないということだけを、果たして真の平和と言っているのでしょうか。

平和とは何か。そして戦争とは何か。未来を担うわたしたちの世代、戦争を知らないわたしたちの世代こそが、この問題に真摯に向かい合わなければならぬ、そう考えます。わたしたちは戦争を知りません。原爆が使われた戦争は遠い昔の出来事であり、現実味がないように思っていました。しかし、校研に向けて平和学習を続けていく中で、戦争は決して自分に関係のない過去の出来事ではなく、むしろ、いつどの時代にも起こりうる進行形の出来事なのかもしれないと思うようになりました。わたしたちが今まで学んできたことは、世界のためでもあり、自分のためでもあり、常に「今」の問題につながるのだと。実際、世界に目を向ければ争いの中に生きている人たちがたくさんい

ます。日本人であるわたしたちにとって戦争は過去の出来事であっても、今現在その渦中を生き、そして命を失っていく人たちがいるのです。一瞬で尊い命を奪っていく戦争、大切に育んできた我が子や家族を奪っていく戦争。どのような理由があつたとしても、戦争を正当化するべきではありません。戦争は何も生み出すことはなく、あつてはならないことなのです。

長崎で、わたしたちは多くの過去の真実を目にし、耳にすることでしよう。その大きく凄惨な真実に目を背け、耳をふさぎたくなる思いにかられることもあるかもしれません。しかし、長崎で目にする、耳にすることこそが「平和の原点」であると思うのです。わたしたちは、思い出さたくないようなつらい経験を思い起こし、後世に伝えることを決心して、残された時間の中で語り続ける被爆者の方の思いを引き継ぐことができる、最後の世代だからです。被爆者の方が伝えたいことは、原爆の悲惨さ、恐ろしさ、戦争の残酷さ、人間の弱さ、愚かさだけではありません。平和の大切さ、命の尊さ、人間の優しさ、強さ、未来への希望、絶望よりも希望を持ち続けて生きること――。明日を信じ、平和を希求する思いを失わなかった方々がいるから、今があるのです。人間はこれまでの歴史の中で、幾度となく戦争を繰り返してきた弱い一面を持っています。ですがその一方で、その愚かさを受けとめ、学び、考える強さも持っています。わたしたちが受け取るのは、負の遺産だけではないのです。核兵器のない平和な世界を作るために、被爆者の方の思いを受け取るわたしたちの世代にできること、一人ひとりができることを考えるのはわたしたちの使命です。

「知ること」「学ぶこと」「考えること」「伝えること」。わたしたちができることは未来へつなげること。経験をしていないから知らなくてもいいということではないのです。何があつたのかを知ろうとする努力をし、そこから平和

について、戦争について、世界について、日本について様々な視点で学びを深めること。簡単にはその答えを手にすることはできなくても、自分が知り、学んだことを考え、自分の思いとして言葉にすること。戦争を語り継いでいる方は、そのように思つて伝えてこられたのだと思います。わたしたち一人ひとりができることは小さなことかもしれませんが。ただ思うこと、ただ祈ること、ただ忘れないことしかできないかもしれません。しかし、長崎で平和へのメッセージを受け取るわたしたちは、被爆者の方の決意と思いに感謝を伝えると共に、この学びが未来へと平和をつなぐ、小さくても確かな一歩になるように、これからあとの世代に語り継ぐ役割も引き継いでいきたいと思ひます。これからの平和を願つて。

二〇一五年度

二〇一四年十月二日 宮城学院中学校第三学年一同

私たちが生まれるずっと前、日本は長い長い戦争を続けていました。そして、今から七十年前の一九四五年八月九日。アメリカ合衆国の爆撃機ボツクスカーから落とされた一発の原子爆弾によつて、長崎の街はささやかな日常を失いました。たった一発の原子爆弾が、ごく普通の日常を過ごしていた隣人の姿を見るも無惨な姿に変えてしまったのです。七万人もの尊い命が一瞬にして奪われ、きのご雲の下には地獄のような光景があつたと言ひます。かろうじて生き残つた被爆者の方々も、放射線の影響による病気に苦しめられ、また、差別的な扱いを受けるなど、さまざまな苦しみの中で長い戦後を生き抜いてこられました。ある被爆者の女性はこう言つています。「あんなに辛いことはもう繰り返したくない。子どもや孫には経験させたくない」と。何十年経つても、本当の意味で被爆者の心の傷が癒やされることはない、これが核兵器の怖さなのだと思います。

戦後七十年。あのような悲惨な結末をもたらしたにも関わらず、今も世界には一万五千発を超える核兵器が存在しています。日本でも戦争体験者が年々減っていき、国民の多くが戦争を知らない世代になりました。私たち若者にとっても、戦争は歴史の教科書で学ぶ知識であり、自分の問題として考えることが難しいのが現状です。しかし、このままあの戦争を過去の出来事として風化させてしまつて本当によいのでしょうか。核兵器が存在する限り、いつまた同じ悲劇が繰り返されるか誰にもわからないのです。被爆者の方が七十年間訴え続けてきた平和な世界を守るために、私たちにできることはなんでしょうか。

私たちにできること。それは、原子爆弾によつて大きな被害を受けたことはもちろん、真珠湾攻撃やアジアでの戦争など加害者としての側面も含め、すべての戦争の記憶を忘れないことです。被爆者の方や戦争体験者の方からお話をうかがい、さらに次世代へとつないでいくことです。そして、戦争は二度と繰り返してはならない、核兵器は地球上に存在してはならないと、たった一つの被爆国として世界へ訴え続けることなのです。そんな大きな取り組みはできないはずがない、そう思う人もいるかもしれませんが。しかし、一人ひとりの小さな一歩が少しずつつながり、やがていつか、大きな一歩へと変わっていくことを信じましょう。世代が変わっても、平和を願う気持ちは同じはずです。遠い過去の出来事と思わずに、未来の私たちに起こるかもしれないこととして考えていきましょう。

私たちは本当の戦争を知りません。しかし、「知らない」ということを「知る」ことが、私たちの一歩なのではないでしょうか。何年の出来事なのか、何人亡くなったのかという数字だけではなく、被爆者の方の痛みを、つらさを、悲しさを、平和への強い思いを知ること。考えること。思いを受け取り、その思いをつなぐこと。それが私たち世代に託された平和のバトンです。

「平和」とは、世界のすべての人が笑顔で安心して暮らせること、自分の思いを言葉にして自由に伝えられること、相手を信頼し差別のない社会を築くこと、武力ではなく対話で関係を築くこと。それが私たちの思う「平和」な世界です。「平和」を実現する力は私たち一人ひとりの心にあるのです。世界中が二度と戦争をしない平和な世界になるように、私たち一人ひとりが被爆者の方々の思いを引き継いで次の世代へと語り継ぐことを、今日ここに宣言します。

二〇一五年十月五日 宮城学院中学校第三学年一同

二〇一六年度

一九四五年八月九日午前十一時二分。これは長崎の街が悲しみと絶望の幕を開けることとなった瞬間です。この日、長崎にいた人々は戦時中ではありましたが、いつも通りの生活を送っていました。そんな当たり前の一日を覆した魔物……それは一発の原子爆弾だったのです。たった一発の原子爆弾のために、街は破壊され、七万人もの命が奪われました。かろうじて生き残った人々でも、大量の放射線を浴び、体を蝕まれ、七十一年が過ぎた今でもその後遺症に苦しんでいらつしゃいます。そして、原爆は人々の命を奪っただけでなく、人々の心までも奪っていきました。

さて、今年で戦後七十一年を迎えました。今年五月には、アメリカの現職大統領としては初めて、オバマ大統領が被爆地広島を訪問しました。彼は、その際のスピーチにおいて「すべての人命はかけがえないものです」と述べました。そう、命には国籍も性別も年齢も関係ないのです。世界中の一人ひとりが大切な存在であるのです。これは私たちのスクールモットーである「隣人愛」の精神にもつながることです。オバマ大統領が広島を訪れたことは、世界中の人々が原爆の恐ろしさについて考える大きなきっかけになったと思います。しかし、今なお、世界には核爆弾を保有する国が多くあります。その脅威を感じながらも、「自国を守るため」に核爆弾を捨てることができずにいます。

それは、私たち人間が常に不信感を抱き合っているからです。原爆は人々の命や身体だけでなく、国と国との信頼関係までも壊してしまうおそろしいものなのです。私たちはこのことを深く心に留めておかなければなりません。

今年の「長崎平和宣言」で田上富久長崎市長は次のように語っていらつしゃいました。「被爆から七十一年がたち、被爆者の平均年齢は八十歳を越えました。世界が『被爆者のいない時代』を迎える日が少しずつ近づいています。戦争、そして戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくかが、今問われています」。確かに、被爆された方々のいない時代は必ずやってきます。そして、それは遠い未来のことではありません。しかし、だからといって、私たちの原爆や平和に対する意識が薄れてしまつてはならないのです。では、私たちにできることは何でしょうか。それは被爆された方々のお話に耳を傾け、その想いを引き継ぎ、伝えていくことです。私たち若い世代は、その託された想いを引き継ぎ、次の世代へと伝えていく義務があります。

原子爆弾は私たち人間が生み出したものです。ですから、人間の意志でなくしていかなければなりません。そのためには、まず隣の人を大切にすることが必要なのではないのでしょうか。全ては互いを信じ、相手を思いやり、隣人を愛することから始まります。一人ひとりが手をつなぎ合うことで、小さな力が大きな力になります。そうすれば平和の輪はどんどん広がっていくことでしょう。

原子爆弾で亡くなられた方々に哀悼の意を捧げます。そして、未来を担う若者の一人として核兵器のない安全な世界と平和の実現のために全力を捧げることがここに宣言します。

二〇一六年十二月十六日 宮城学院中学校第三学年一同

二〇一七年度

この、緑豊かな長崎の街に原爆が投下されたのは一九四五年八月九日午前十一時二分のこと。すさまじい爆風と熱線により、長崎の街は一瞬で廃墟と化してしまいました。三日前の八月六日に広島原爆投下が起きたことにより、日本国民に緊張が走る最中の出来事でした。してその六日後の八月十五日、多くの人間を犠牲にし、苦しみ悲しませた戦争は終わりを告げたのです。

日本は世界唯一の被爆国です。我が国以外に被爆を経験した国はありません。つまり、戦争、原爆投下の恐ろしさを被爆した側として世界に発信できるのは日本だけなのです。しかし時の流れに伴い被爆者は高齢化を迎え、被爆体験を直接お聞きする機会は貴重なものとなりました。だからこそ、戦争が起きていたという過去と、原爆によって多くの犠牲者が出たという事実を次世代に語り継いでいくため、私たちの世代がより多くの戦争について見聞きするところが大切なのだと思います。

戦後七十二年が経った今、最も怖いのはその事実を「無関心」なこと、そしてその事実を「忘れていく」ことです。今の日常が当たり前だと思っただけではありません。一発の原子爆弾により、いつも傍らにいてくれた家族、友達が突然いなくなってしまうときの痛みや苦しみは、どれほどのものだったのでしょうか。また原爆の被害はその瞬間だけでなく、「放射能」という形でその後も長い年月に渡って人々を苦しめています。「放射能がうつる。」と言われ隔離されたり、「奇形児が生まれる。」と言われて結婚を認められなかったりなど、私たちには想像もできない偏見や差別もあったのです。私たちはこのことを、いつ、どの時代になっても考える必要があるのです。

戦争をうみだすのは、他でもない人間です。そしてまた、平和を築き上げていくのも、人間なのです。「日本」と

いう視野から「世界」に視野を広げたとき、私たちの世界は今、「平和」と言うことができるでしょうか。その答えは限りなく「NO」に近いと感じています。同じ時代を生きても、世界には私たちとは真逆の苦しい生活を送っている人が数え切れない程います。南スーダン・コンゴ民主共和国では、反政府勢力が国連職員を一時人質に取り、争いが起きました。また、国や地域によって男女の扱いが違うため、早すぎる結婚や女子教育を阻む様々な障害に直面する女の子が、世界にはたくさんいます。このような、地域紛争や男女における悲惨な差別など、私たちには計り知れない出来事が数多く存在しているのであります。

「平和とは何か。」と問われたとき、自信を持って即座に答えることができるでしょうか。「争いがない世界」これこそが平和な世界だと私たちは確信しています。しかし、世界から争いをなくすのは、とても困難なことです。今年八月二十九日には北朝鮮によるミサイル発射実験が行われ、日本の上空をミサイルが通過しました。私たちはそのとき、戦争の恐ろしさをあらためて肌で感じ、二度と戦争を起こしてはいけないと強く思いました。平和について考える。これは人生の永遠のテーマであるべきなのです。

日本国憲法施行七十年を迎えた今年、八月七日に核兵器禁止条約が国連で採択されました。少しずつではあるものの、平和に向けての一步は確実に踏み出されています。これまで造り上げられた「平和」の上にあぐらをかくにはなく、「平和」を維持すること、そしてその平和を世界において当たり前にすることが現代に求められています。

平和学習の一環として、「二重被爆」という映画を見ました。その中に「One for all, All for one」「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という言葉が出てきました。この言葉は平和の象徴だと思います。

私たち人間には、言葉があり、心があり、そして過去から学ぶ能力があります。これらを最大限に行使し、絶対悪

である核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けて尽力することを、ここに宣言します。

二〇一七年十月四日 宮城学院中学校第三学年一同

二〇一八年度

一九四五年八月九日午前十一時二分。長崎市浦上地区の上空五〇三メートルで原子爆弾が炸裂しました。長崎原爆資料館に展示された時計は、空から蒔かれた悪夢の種が長崎の美しい街を、罪のない人々の命を、一瞬にして無残に奪った時刻を今も刻んだままです。水を求めて、また、大きな火傷を負って力尽きたたくさんの人々。ファットマンと名付けられたたった一発の原子爆弾によって、爆心地から一キロ以内にいた人のほとんどが即死、この年だけで七万人もの人々が命を落としました。あの日から七十三年が経った今でも、体や心に負った深い傷によって苦しんでいる人がいます。原子爆弾は、その時だけでなく今に至るまで、そして未来にも凶器として存在し続けているのです。

戦争は誰もが被害者となり加害者ともなります。誰も幸せにしない戦争を、人類はなぜくり返すのでしょうか。力でやられたから力でやり返す、そのような力による争いを選択すれば世界が壊れてしまいます。人の命は数字で計れるものではないのです。戦争はどちらか一方が引き起こすのではなく、そのきっかけを作ってしまう人間の心の弱さや傲慢さが引き起こすものです。今、世界では「自国第一主義」を声高に叫び、他国を威嚇する姿勢を露わにする国が増えてきたように感じます。戦争を経験した人たちの中には、現在のこうした世界の状況を危ういものだと心配する人もいます。「また戦争への道を進んでいるのではないか」という懸念です。私たちは過去に何があつたかを学び、今起こっている戦争を止めるために、また、未来に戦争を起ささないために、一人ひとりが相手を思いやる心を持つべきです。

「核兵器と人類は共存できないのです。こんな苦しみはもう私たちだけでたくさんです。人間が人間として生きていくためには、地球上に一発たりとも核兵器を残してはなりません。」これは、昨年亡くなられた被爆者・谷口稜睡さんの言葉です。被爆者の平均年齢が八十二歳を越えた今なお、「戦争の本当の恐ろしさ」「平和の尊さ」を、命の限り語り継いでいこうと懸命に生きている被爆者の方たちがいます。あのような悲惨で恐ろしいことを二度と起こしてはならない、という強い願いを込めた被爆者の叫びを受け、世界各地の人々が本当の平和を目指して活動を行ってきました。そうした努力の結果として、昨年「核兵器廃絶国際キャンペーン (I CAN)」がノーベル平和賞を受賞しました。「I CAN」の趣旨に共鳴し共に活動してきた被爆者・サーロー節子さんは、授賞式で「これを核兵器の終わりの始まりにしましょう」と訴えました。しかし、今世界には一万四千四百五十発の核弾頭が存在します。多くの人々の命を奪い、今も多くの人々を苦しめる核兵器が存在している世界を「平和」と言うことができるでしょうか。戦争をしていないから「平和」であると言っているのでしょうか。「平和」がどのようなものなのか、言葉だけで安心してしまわずに、私たち一人ひとりが「平和」の本当の意味を考え続けていかななくてはなりません。

私たちは戦争を体験していません。しかし、私たちは戦争で傷ついた人々の悲しみを知り、戦争の恐ろしさと核兵器の脅威を学び、戦争がどのような惨状をもたらすかを知っています。戦争のない時代を生きている私たちだからこそ、感じることでできる「怖さ」があります。日常を失うかもしれない「怖さ」を、私たちは持ち続けるべきなのです。一人ひとりが「私に何ができるのか」を考え、被爆者の方が見つないできた「平和のバトン」を受け継ぎ、また次の世代につないでいくこと。過去の過ちを繰り返さないために、過去・現在・未来の出来事から目を背けずに「知ろう」とすること。一人ひとりにできることは小さいことかもしれませんが、しかし、被爆者の方が七十三年をかけて止

めることなく続けてきた平和への歩みを、私たちが止めてしまつてはならないのです。たとえ小さな一歩であっても、この平和への歩みに踏み出していきましょう。

一日でも、一時間でも、一秒でも早く、核兵器のない平和な世界になることを願つて、一人ひとりが平和の担い手となることを宣言します。

二〇一九年度

二〇一八年十月五日 宮城学院中学校第三学年一同

本当の平和とは何か。戦争を体験した人が段々と少なくなりつつある今、一人ひとりが真剣に考え、自分なりの答えを見つけるべき問いです。

現在、私達の生活は、豊かで、安全で、時折退屈になるくらい、単調に過ぎていきます。空を見上げれば、敵の航空機がこちらに向かつて機銃掃射してくるのが見えた・・・などということはなく、一面の青がただただ広がっています。空襲警報が昼夜問わず鳴り響くことも、大好きな家族を兵士として送り出すことも、たった一発の爆弾が街や人の命を一瞬にして消し去ってしまうこともありませぬ。今では信じられないようなこれらの出来事は、七十四年前までは当たり前になり、その度に多くの人が命を落としていきました。亡くなった人達はみんな、誰かの家族であり、兄弟であり、子供でした。私達と年齢の変わらない、未来のある若い人も大勢いたはずです。戦争は、原子爆弾は、そんなことは全く関係ないとはかりに、沢山の人の命を奪っていきました。そして今でもなお、原爆によって負った心や体の傷を抱え、苦しんでいる人が多くいます。戦争は勝つても負けても、全く損害が出ないということはありません。どちらの国も被害者であり、加害者なのです。戦争は誰も幸せにしません。武力によって、一時的な解決

は見込めるかもしれませんが、その不安定な基盤の上に成り立った「平和」は、いつか必ず崩れる日が来ます。本当に必要なのは、争いではなく、話し合いによる和解なのだと思います。

「全ては過去のこと。今の平和な日本では、戦争なんて起こらない。」本当にそうでしょうか。核兵器を一万三千八百個余り所持し、争いが絶えないこの世界が、今日もたくさんの方が、貧困によって餓死しているこの世界が。これらの問題は、一部の国での出来事であって、自分達とは関係が無いのでしょうか。そうではありません。世界ですでに起こっているということは、日本でも起こる可能性がある、ということです。だからこそ、私達は学ぶべきです。唯一の被爆国として、あの日広島・長崎で何が起こり、誰が犠牲になったのか。原子爆弾がどんなに恐ろしいものであったのか。生涯、深い悲しみと怒りを抱えて生きていくことになった、被爆者の思いを。私達は学ぶべきです。比較的裕福な先進国に生きる一人として。募金がどんな意味を持つのか。食べ物が無闇に残すとはどういうことなのか。学校に行けない女の子達が、どんな思いで毎日を過ごしているのか。世界の問題を、私達が直接解決することは難しいでしょう。しかし、自ら「知っていく」ことが出来れば、おかしいことに対し声を上げることが出来ます。手遅れになる前に、核兵器の問題に、世界に、もつと目を向けていきましょう。

「知らない」限り、人間は何度でも同じ過ちを繰り返します。戦争を直接経験していない私達が出来ることは、被爆者の方のお話を聞き、思いを知り、それを次の世代へとつなぐことです。今ある、当たり前で大切な日常を壊さないためにも、先頭に立って活動していかなければなりません。一人ひとりが自分に出来ることを探し、行動に移しましょう。どんなに小さな声でも、どんなに些細なことでも、自ら行動を起こさない限り、世界は変わってはいけません。七十四年前の人達が託してくれた、「平和」を実現するためのバトンを、今度は私達が受け取って、歩み出しましょう。

世界の未来のために、本当の平和とは何かを考え、それを作り出す者となることをここに宣言します。

二〇一九年十二月二十日 宮城学院中学校第三学年一同

二〇二〇年度

一九四五年八月六日、九日。広島と長崎に原爆が投下されました。それぞれ、日常の時間が流れていました。それを一つの原子爆弾が一瞬にして火の海にしたのです。それはとても残酷なものでした。川や海は死体で埋まり、周りは火で囲まれて、人々は皆、体が溶けている。まるで地獄のような景色でした。

七十五年前のあの日、日本は世界唯一の被爆国となりました。愛する家族を兵士として戦地に送り、日々空襲に怯える生活を送っていた多くの人々の尊い命をたつたひとつの爆弾が奪いました。原爆によって亡くなった人々の多くは、戦地に行けない女性や高齢者、そして私たちと同じように未来を持っていた子どもたちでした。

被爆者は、核兵器は存在してはならないそして二度と戦争をしてはならないと深く心に刻み、日本国憲法における戦争放棄を、憲法九条を大切になさっています。原爆で生き残った人々は原爆によって負った心や体の傷、後遺症によつて今もなお、苦しんでいます。また日本は原爆だけでなく、戦争においても多くの被害を受け、多くのものを失いました。

もちろん、戦争による被害は日本だけではありません。他国も多くのものを失ったのです。戦争は大切なものを失うという誰一人望まない結果を生み出します。戦争は誰も幸せにしないのです。戦争から平和が生まれることはありません。平和を築くために必要なことは何か。平和を実現するためには「相手と意見が対立したときに武器を取らずに、話し合いを通して相手に理解を求めること」が必要不可欠でしょう。

本当の平和とはいったい何か。今年は終戦から七五年という節目の年だからこそ、私たちはこの問いについて自分の答えを見出すべきです。

今も、世界では様々な国が核兵器を保有し、開発を続けています。貧富の差や差別は根強く、戦争や紛争、テロなどでたくさんの方が亡くなっています。戦争は過去のものではなく私達にも起こりうる危険なのです。

私達はこれまで平和について学び、本当の平和について、また平和な世界をつくり出すためにどうすべきか考えてきました。実際に被爆者の方からオンラインでお話を聞く貴重な機会を通し、戦争や原爆の恐ろしさや心が痛むほど悲惨な当時の様子について学ぶことができました。焼き場に立つ少年の写真についてのビデオ鑑賞では、七五年前の長崎への原爆投下やその後の被爆者の思いについて感じることができました。それらの学びを通して思うことは平和な世界をつくり出すためには私たち一人ひとりが戦争や原爆、核兵器について学び、平和について考えることが必要だということです。

まず戦争を、そして原爆の恐ろしさを知らなければ声を上げることもできません。そして、戦争体験者がなくなっていく中で、知ったことをこれからの未来に若い私達が「繋ぐ」ことこそ平和な世界を実現するために取り組むべきことだと考えます。

行動しなければ世界は変わらない。どんなに小さな一歩でも決して無力ではありません。かけがえのない心や命を大切にしていきましょう。

私達は平和な世界をつくり出すために本当の平和について深く考え、平和への想いを「繋ぐ」者となることをここに宣言します。

二〇二〇年十月九日 宮城学院中学校第三学年一同

二 平和宣言作成にあたって

平和宣言は、長崎校外研修旅行がはじまった当初は校外研修旅行委員（各クラスから二名ずつ選出され、校外研修旅行の企画から当日のリーダー的な役割を担う）が夏休みに各自考えたものを一つにまとめて作成をしていた。二〇一五年度からは校外研修旅行委員だけでなく中学校三年生全員が夏休みの課題として平和宣言を書き、それらを校外研修旅行委員が一つにまとめるという方式に変えて今日に至る。¹⁾

ちなみに筆者が社会科の授業担当者として平和宣言の作成を指導した二〇一七年度に、生徒に課題として提示した内容は次のようなものであった。なお中学校三年生の社会科担当者が変わっても基本的な内容は変わらない。

「私の平和宣言」

平和に対する考えを八〇〇字〜一六〇〇字程度でまとめること。

なお参考にした新聞記事なども一緒に付けて提出してください。

〈注意事項〉

① 以下のことについては本文のなかで必ず触れること

- ・ 原子爆弾の投下・唯一の被爆国であることについて。
- ・ 今年ならではの平和にかかわる動き。

(例) 日本国憲法施行七〇年という節目の年にあたって「平和」に対する思い

・ これまで平和学習などで学んできたこと、考えてきたこと。

・ 自分自身が「平和」な世界にするためにどのようなことを取り組んでいくか。

②考えるヒントとして欲しいこと

・ 八月六日（広島）、九日（長崎）、十五日（終戦）の次の日の新聞に平和宣言や戦争に対する記事が新聞に掲載されると思います。それをぜひ参考にしてください。

・ 核をめぐる問題や憲法改正問題など今の世の中で話題となっている出来事を新聞やインターネットで調べて学び、その成果を盛り込んでください。

三 平和宣言作成の意義について考える

では平和宣言作成の意義とはなんだろうか。

まず時事問題として平和に向き合う機会ということがある。前掲した過去十年間の平和宣言を通覧すると、各年度の平和に関する世の中の動きを振り返ることができる。具体的には平和宣言の傍線部分に表れていると考える。

キーワードとして取り上げるならば「東日本大震災（二〇一一年度）」、「放射能を身近に（二〇二二年度）」、「東京オリンピック開催決定（二〇一三年度）」、「北朝鮮のミサイル問題・核兵器禁止条約の国連採択（二〇一七年度）」、「核兵器廃絶国際キャンペーン（I CAN）がノーベル平和賞を受賞（二〇一八年度）」といった具合である。日本だけで

はなく国際社会における平和問題に関心を寄せる貴重な機会となつていことがわかる。

さらに他人事ではなく自分自身の事として平和という問題に向き合うということにある。どこかの誰かが考える問題、または自分とは関係のない他国で起こっている問題ではなく、宣言とかたちでまとめることにより、自分たちがどのように平和について向き合っていくのかということを主体的に考えるのである。

一人ひとりがまず自分自身の事として平和宣言をまとめ、それを校外研修旅行委員が学年としてのひとつの思いとしての平和宣言にまとめる。それを被爆地長崎で平和祈念像の前で代表生徒が読み上げ、その言葉を学年全員で聴く。そうした過程を経て自分自身が平和を築いていく存在になつていかなければならないという使命を心に刻むこととなるのだと考えている。

むすびにかえて、平和を築いていく者としての覚悟

戦後七十六年を迎え、いよいよ戦争を経験された人々の平和に対する切実な思いを戦後生まれの若い世代にどのように継承していくかという問題は深刻な段階に至つていと感じている。筆者が宮城学院中学校・高等学校に勤務した二〇〇三年度からの数年間は高等学校で日本史の授業を選択した生徒に夏休みの課題として祖父母などに戦争体験を聞きそれをまとめるという課題を出してきた⁽⁵⁾。しかし年度が進むにつれて祖父母の年齢も戦後生まれの人が多くなくなり、この課題自体の継統が難しくなり廃止せざるを得なくなつた。

そうした状況は全国共通であり、直接身近な人から戦争体験を聞く時代から、戦争体験をまとめた書籍を読むことを通して平和の大切さを考える時代になりつつあるといつても過言ではないだろう⁽⁶⁾。そのような状況にあるからこそ、

本稿でその一部を紹介した長崎への校外研修旅行の取り組みが平和教育に果たす役割も決して小さいものではないと考えている。

さて、宮城学院中学校を卒業して宮城学院高等学校に進学すると、校外研修旅行としてシンガポールを訪れる⁽⁷⁾。その目的のひとつはアジア太平洋戦争における「加害」の立場から平和について考えることである。その際、宮城学院中学校の卒業生から自分たちは中学校で平和の大切さについてしっかりと学んできたという自負を持っていると感じられる発言を聞くことが多い。そうした発言を聞くと長崎校外研修旅行の一連の学びが生徒の中でしっかりと身になっているのだという喜びの気持ちが湧き上がってくる。

聖書に「平和を実現する人々は幸いである」(マタイによる福音書五章九節)という一節がある。長崎校外研修旅行そして平和宣言の作成が、一人の自律した女性として平和を築いていく、そのような覚悟の形成につながっているのではないだろうか。

〈注〉

- (1) オンラインではあったが被爆者として若者に平和への思いを語ってください、本校の第一回目の長崎校外研修旅行から講話をお願いしている下平作江様から体験談を伺うことができた。なおオンラインであるという特徴を生かして中学校一年生と二年生も講話を一緒に伺うという機会となった。
- (2) 拙稿「長崎校外研修旅行を通して平和について考える―宮城学院中学校三年次における平和学習の取り組みから―」(『キリスト教文化研究所研究年報 第四二号』宮城学院女子大学 二〇〇九年)
- (3) 拙稿「宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育―『長崎新聞』作成にいたる一連の取り組み―」(『キリ

- (4) スト教文化研究所研究年報 第五三号「宮城学院女子大学 二〇二〇年」
なお中学校三年生ひとりひとりが書いた平和宣言は冊子にして、原爆資料館に平和モニュメントとともに献納させていた
だいている。
- (5) 女子学院中学校では三年生に同様の課題を出しており、一冊の本としてまとめられている。女子学院中学校「祖父母の戦争体験」編集委員会編『一五歳が受け継ぐ平和のバトン 祖父母に聞いた235の戦争体験』（高文研、二〇〇四年）。
- (6) そうした書籍は枚挙にいとまがない。東京の高校生平和のつどい実行委員会編・東京都歴史教育者協議会協力『高校生が心に刻んだ 戦争と平和の証言』（平和文化、二〇二二年）など。
- (7) 二〇一九年度がシンガポール研修の初年度であった。その後、新型コロナウイルス感染症の拡大のため、研修地を沖縄に変更しているが、二〇二〇年度、二〇二一年度は「中止」とせざるを得なかった。
- (8) 中学校の長崎校外研修旅行ではどちらかといえば「被害」の視点からの学びの要素が中心となっている。高等学校での「加害」の視点からの学びを踏まえて、「被害」「加害」の両面から戦争について考えることで、さらに平和に対する学びを深いものにするのではないかと考えている。